

修士論文研究ノート トマス・アキナスにおける「個」としての「人間」：「魂」の「個体化」を中心にして

著者	石田 隆太
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	165-167
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122583

【修士論文研究ノート】

トマス・アクィナスにおける「個」としての「人間」：
「魂」の「個体化」を中心にして

石田 隆太

序

第一章 「個体化の根源」としての「指定された質料」

第一節 「個の概念」(ratio individui)と「個体化の根源」

第二節 「指定された質料」と「量」による「質料」の「分割」

第三節 「次元」と「個体化」

第四節 「限界付けられない次元」

第二章 「天使」の「個体化」

第一節 天使の非質料性について

第二節 種の多数化について

第三節 種の多数化と世界の完全性について

第三章 「人間の魂」の「個体化」

第一節 「形相」でありかつ「この或るもの」(hoc aliquid)としての「魂」

第二節 魂の個体化とエッセ

結語

本論の目的は、トマス・アクィナス (c.1225-1274) において「個」(individuum) としての「人間」がいかなるものとして捉えられているのかを考察することである。その際、トマスが様々な著作で述べている「個体化の根源」(principium individuationis) を媒介としながら、「天使」や「人間の魂」の「個体化」という事態を扱った上で、「人間」の場合に真の意味で「個」として捉えられるものが「人間の魂」ではなく、魂と身体の複合からなる「人間」であることが示される。さらに、「個体化」される際に「人間」が受け取る「エッセ」(esse) が、神による創造によってもたらされることが確認される。

各章の構成は次の通りである。まず第一章においては、質料的事物の「個体化」に

関するトマスの学説を確認することが目指されるが、差し当ってトマスにおいて「個」というものがどのように定義づけられているかを確認しながら「個体化」の定義を確認する（第一節）。トマスにおいて特徴的な個体化理論は「個体化の根源は質料である」という学説であり、この考え自体はアリストテレスにまで遡るものである。しかしより厳密に言えば、「個体化の根源」としての「質料」は「指定された質料」だというのがトマスの学説であり、この点に対する説明が第一章全体を通じて求められる（第二節、第三節、第四節）。その際に問題になってくるのは『ボエティウス「三位一体論」註解』というトマスの著作の第四問題第二項である。ここでは、「個体化の根源」としてよりふさわしいのは「限界付けられた諸次元」(*dimensiones terminatae*)ではなく「限界付けられない諸次元」(*dimensiones interminatae*)であるということが述べられている。トマスが「限界付けられない諸次元」として実際にどのようなものを想定しているのかを推測することは該当箇所の記事からだけでは難しいが、少なくともそのような「限界付けられない諸次元」と呼ばれるものが「質料」において「予め知解されるもの」であるという点をトマスが強調している点に注目すれば、やはりトマスはあくまで「個体化の根源」は「質料」であって、「量」のような「附帯的なもの」だけを「個体化の根源」として想定してはいなかったことを読み取ることができる。

次に、第二章においては天使の「個体化」に関するトマスの学説を確認する。トマスにおいて、非質料的なものである天使は「種の数だけ個がある」とされており、天使の有する「形相」が個体化の根源であると言える余地があるだろう。「人間の魂」と「天使」は、それ自体は質料との複合を含まないという点で、共に「分離された実体」ないし「単純実体」であると言うことができるが、「人間」と「天使」の「個体化」を考えた時に（特に、もし「天使」に関しても「個体化」という事態が適合する余地があるならば）、前者は「一つの種における個の多数化」という事態になるのに対して、後者は、「種」が一つではないという意味で、「種の多数化」という仕方での「個体化」を捉えることができるだろう。さらに、個体化における両者のこうした違いは「世界の完全性」という論点にもつながるものである。それ故に第二章では、トマスが「天使」において「質料」とのいかなる複合も認めていなかったことを確認し（第一節）、次に「天使」における「種の多数化」という言説を確認し（第二節）、その上で「世界の完全性」という論点をふまえて（第三節）、「個」としての「天使」

の位置づけを検討する。

そして第三章では、「人間の魂」の個体化に関するトマスの学説を確認する。まず予備的作業として、「人間の魂」が「形相」でありかつ「この或るもの」(hoc aliquid)であると言われていることを確認する(第一節)。アリストテレスの質料形相論に沿う限りで「人間の魂」が「形相」であることをトマスは無論否定しないが、「魂」が「この或るもの」であるかどうかということには留保が必要になってくる。「この或るもの」と言われるものには、トマスによれば「それ自身で自存するもの」と「自らの内に種の完成された本性を有しているもの」がある。トマスが下している結論においては、「魂」は前者の「それ自身で自存するもの」という意味では確かに「この或るもの」と言えるだろうが、後者の「自らの内に種の完成された本性を有しているもの」という点では「この或るもの」ではないとされる。何故なら、「人間」の場合、完成された「人間」とは「魂」と「身体」が合一された状態だとトマスは考えていたからである。このことは、神学者でもあるトマスにとっては「復活」という教義と大いに関係のあることである。以上の議論を踏まえて、次に「魂の個体化」という事態を「エッセ」の観点から論じる(第二節)。そこで浮かび上がってくるのは、「神」による「創造」の場面である。すなわち、「神」以外のすべての被造物においては「エッセ」と「エッセンティア(本質)」が異なっているのだから、或る被造物がこの世界に実在するためには、「エッセンティア」とは別に「エッセ」が「神」から与えられなければならないというのがトマスの根本的な主張であった。そこから本論の結論として、「個体化」という事態にとって「エッセ」を受容するという事態が真の意味で根源的であることが示される。

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学)